



Doshisha University Academic Repository

同志社大学学術リポジトリ

同志社大学英語英文学研究会1978年度発表要旨

著者	同志社大学人文学会
雑誌名	同志社大学英語英文学研究
号	20
ページ	138-145
発行年	1979-01
権利	同志社大学人文学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000001563

同志社大学英語英文学研究会

1978年度発表要旨

大泉昭夫・今関恒夫編

第一回研究会

5月22日(月)14時30分～16時

Sterne の諷刺

能 口 盾 彦

Tristram Shandy で Sterne は当時の文人達と同様に、科学・文明の進歩を諷刺すると同時に、英国国教会の一牧師として他の宗派を嘲笑している。世俗的な機知を駆使する小説家 Sterne と謹厳な宗教人の心象が重複して作者の意図は容易に推測し難いが、Sterne の諷刺の中心主題は哲学と宗教に要約され、Dr.Slop の存在に集約されている様に思われる。

『同英研』16号で述べた様に、Dr.Slop による *Tristram* の鼻の欠落は当代の“科学万能主義”に対する諷刺である。また Dr.Slop は熱烈なカトリック教徒として描かれ、彼の狂信的姿勢にカトリック教の“教義至上主義”が諷刺されている。Sterne が Dr.Slop をカトリック教徒に仕立てた所以は、当時の民衆の反カトリック気運を反映したものと言え、同宗派に対する彼の反撥の気持が Sterne の諷刺的性向を強く促したのであろう。

Oppositions in Chaucer

二 村 宏 江

一つの価値観に固執しないという点で、Chaucer は同時代の Langland と Gower とともに異なったタイプの詩人である。Chaucer のこの *elusiveness* は批評家の等しく認めるところだが、P. Elbow はその著書 *Oppositions in Chaucer* で Chaucer の作品の中にしばしばあらわれる *opposition* というも

のが、結局どちらの側をも肯定するような形で扱われており、それは Boethius にも共通する一つの思考パターンであると指摘している。具体的には *Troilus and Criseyde*, *The Knight's Tale*, *The Nun's Priest's Tale* が取り上げられているが、研究会では Elbow の解釈を紹介しながら、それをもとに、それぞれの作品にあらわれている opposition というものが最終的にどのような "a satisfactory sense of conclusion" を与えられているのか考えてみたい。

第二回研究会

6月12日(月) 14時30分～16時

Ash Wednesday に語り切れなかったこと

中 井 農

Ash Wednesday (1930) が個人的な心を唄ったものにはちがいないが、スペンダーの言うようになっての文明へのこだわりが抜け落ちたと見るのも正確ではない。パートⅤのコトバについての語り口のなかに、エリオットの30年代の社会批評の基調が隠されていること、ドラマへの志向が発散されぬままに潜んでいることをテキストから検討してみたい。

1934年に *The Rock* のためのコーラスを依頼されることになって、*Ash Wednesday* に秘められた可能性に方向が与えられる。ひとつはむろん詩劇への道であり、ひとつは、コトバを共有する場としての教会を核とする教区の役割への意識的な視点である。これはかつての伝統論を30年代へつなぐことになる。

The Waste Land を書いた前衛詩人というレッテルを返上するエリオット

トの姿を追ってみたい。

欽定訳聖書における「読者への序文」についての一考察

北 垣 宗 治

1611年に出た欽定訳英語聖書(A.V.)には、フォリオ版で12頁に及ぶ、異常なまでに長い序文がついている。これを特に翻訳論の立場から考察することがこの発表の目的である。執筆者はA.V.の改訳者たちの一人であった Miles Smith であると伝えられている。スミスは聖書翻訳の歴史を概観し、A.V.改訳の目的を規定する。彼は当時の聖書翻訳に関する二種類の完全主義者たち、すなわちジェジュイットの学者たち、ならびにピューリタンの学者たちの批判に対し、A.V.を擁護するための論陣を張る。その立場は結局のところアングリカンの *via media* ということになるのであるが、それでもスミスはピューリタンの立場に傾いていた。改訳委員会五十余名を代表した公的な序文の筈だが、この序文がむしろ私的な、力強い調子で貫かれていることも特色の一つである。

第三回研究会

7月10日(月) 14時30分～16時

いかに *Hamlet* を読むべきか

奥 恭 子

Hamlet に関しては秀れた批評家の間でさえも余りにも相互矛盾する意見が出されており、どう理解すべきか、いかに読むべきかの問題を改めて考え

る必要がある。私はこの問題を次の2点から模索してみた。

(1) Fergusson の *The Idea of a Theater* を参考に、作品の logical coherence を求める態度が *Hamlet* に対してどの程度とれるかを検討する。

(2) 自分としては、*Hamlet* が Lily B. Campbell の言う最も広義の復讐劇(神の復讐を主題にした劇)であるという観点を採用し、同じような観点に立つ批評家の見解との比較参照を通じて、自分の見方の大筋を固めたい。

Fiction と Faction — Alex Haley, *Roots* の場合 —

宮 井 敏

大正七年芥川龍之介が「奉教人の死」を発表した時、筆者が出典としてあげた「慶長元年三月長崎刊行のキリシタン版れげんだおうれや」をめぐって読書界は天下の奇書の出現かと騒然となったが、新村出博士は、これは偽書であり芥川の仮託であると看破された、と云う話がある。最近でも辻邦生は「安土往還記」で「南仏デロス市の著名な蔵書家C. ルジェース氏の書庫で発見された古写本」からヒントを得たと記し、遠藤周作は「沈黙」の前書きで「ポルトガルの海外領土史研究所にセバスチャン・ロドリゴの書翰があり、云々」と書き出している。これらはいづれも原資料の出典を明示する形で、story を組み立てているが、実は作者の全資料をこなし切ったと云う自信が仮空の偽書をかゝげるといふ形をとらせたものであろう。近年、作家の使用する素材と、それを処理する imagination の問題、或は fiction と fact の問題が盛んにとり上げられているが、novel の世界と、reportage, documentary, non-fiction, semi-documentary 等々の境界領域がますますはっきりしくなっている一つの証拠でもあろう。

小説の素材を専ら歴史にとる歴史小説の場合でも、司馬遼太郎「翔ぶが如く」(小説家)、江藤淳「海は甦える」(評論家)、奈良本辰也「洛陽燃ゆ」(歴史家)のように正史に題材を求める場合と、本篇「ルーツ」や山崎明子「サン

「ダカン八番娼館」、森崎和江「からゆきさん」のように埋もれた裏面史に光を当てる場合、或は平野謙「リンチ共産党事件の思い出」、新田次郎「聖職の碑」、夏之炎「北京の一番寒い冬」のように現代史の一部を資料とする場合などが上げられよう。

一方また個々の歴史的事実以外の巨大な社会的現象一般を document として story の下敷きに使うものに城山三郎「小説日本銀行」、Arthur Haley *Money Changers*、広瀬仁紀の三部作等の銀行小説、堺屋太一「団塊の世代」、山崎豊子「仮装集団」等の情報小説、咲村観「左遷」、井上孝「俺の会社だ!」等の企業小説、さらには問題提起や告発を意図する有吉佐和子「複合汚染」、石牟礼道子「苦海浄土」等の問題小説、Watergate をめぐる inside stories、H. R. Haldman, *The End of Powers*、John Ehrlichman, *The Company* 等いわゆる check-book journalism に支えられた institutional fiction などが考えられる。*

一般にこうした story は情報である資料の retold に終始する「題材主義」に終わってしまう傾向が強く、作品としては素材が未消化で、作者の imagination が発揮されていない事が多い。又それだけに資料提供者、その他からの盗作、剽窃問題が起る事が屢々である。*Roots*、→Harold Caullander, *African*、Margaret Alexander, *Jubilee*、宮原昭夫「誰かゝ触った」→鈴木敏子「らい学級の記録」、山崎豊子「不毛地帯」→今井源二「シベリアの歌」等が問題となった。

* (他に大岡昇平「事件」や大宅賞受賞の伊佐千尋「逆転」等の裁判小説等も。)

第四回研究会

9月25日(月)14時30分～16時

Mark Twain の *The Gilded Age* と “American Procession”

那 須 頼 雅

「新しい種類の人間」アメリカ人の特性はといえば、irreverence(不敬)だと言えようし、さらに、その最もユニークな様態はといえば、“American Procession”(「アメリカ人の流れ」)だと言えるだろう。ゴールドラッシュの熱にうかされ、God 支配の文化圏と訣別する irreverence をおかし、東から西への大移動“American Procession”にあえて踏み切ったことは、たしかにアメリカならではの経験であった。

Mark Twain は、その「新しい種類の人間」を標榜し、その最も忠実な文字化に終生つとめた作家である。それ故、irreverence と “American Procession” とは、彼の作品の中で大きな比重を占める。とりわけ、初期の作品で、Charles D. Warner との合作故に彼の本音がむき出しの *The Gilded Age* は、最も典型的な “the novel of American Procession” だと言えよう。従来とかく、軽視、もしくは無視されてきたこの共同執筆作品が、この観点から見直して始めて、そのもてる真の価値を示して迫ってくる。

ちなみに、“procession” と言えば、大きく分けて2種ある。たとえば、Joseph Smith の創設したモルモン教徒が迫害にあって1846年冬、ユタ州への移動に踏み切った “pilgrims’ procession”，そして、先に触れた、1849年のゴールド・ラッシュで大西部へと、なだれのようにつづいた “devils’ procession” とである。今までアメリカに見られた多種多様な “procession” は、この2つのいずれかにまとめられる。Mark Twain は、彼自身、若くし

て、この両種の“procession”を経験し、その後も、機会あるごとに、それを実践し、深い関心を寄せた。*The Gilded Age*のSquire Hawkins一家の明るい“procession”と、No.44, *The Mysterious Stranger*の“Assembly of the Dead”の暗い“procession”とは、全く対照的で、読者を驚かすものだ。これこそ、「明るいClemens」と「暗いTwain」とを典型的に表わすかにみえるであろう。しかし実はその基本に流れる精神では同じなのだ。つまり、この2つともが、“Fountain of Youth”に向う“American Procession”にはかならないからだ。

ホーソンの序文

松 山 信 直

ホーソンが自らの短篇集・長篇につけた序文は、序文をつけた作品との関連の上だけで論じられるか、ロマンス小説を主張した『七破風の家』の序文のように、自作の性格を作家自身が語る資料として部分的にとりあげられただけで、序文のすべてをホーソン文学全体のもとで検討することはなされていなかった。

1964年の百年祭を記念して出版されはじめたCentenary Edition(ほぼ出版が完了した)には、各作品に“Historical Introduction”が付されていて、未出版の資料(特に手紙)を十分にふまえたこの序言によって、伝記中でも欠けていた各作品の出版前後の事情がかなり明らかになり、序文のさまざまな意味を解明することが可能になった。

今回はこのようなことに基づいて、ホーソンの序文(もしくは、これに類する作品の序章)の検討の一部を発表する。

A Bibliography of Hawthorne's Prefaces

Date of Pub.	Works (Genre)	Place & Date of Preface
1828.10	<i>Fanshawe</i> (N)	
1837. 3	<i>Twice-Told Tales</i> (SS)	
1840.12	* <i>Grandfather's Chair</i> (J)	Boston, November, 1840
1841. 1	* Famous Old People (J)	Boston, December 30, 1840
1841. 4	* Liberty Tree (J)	Boston, February 27th, 1841
1842. 4	* <i>Biographical Stories For Children</i> (J)	Boston, January 17, 1842
1842.12	<i>Twice-Told Tales</i> , 2nd ed. (SS)	
1846. 6	+ <i>Mosses From an Old Manse</i> (SS)	(Introductory) "The Old Manse"
1850. 3	+ <i>The Scarlet Letter</i> (N)	Introductory: "The Custom House"
1850. 4	+ * <i>The Scarlet Letter</i> , 2nd ed. (N)	Salem, March 30, 1850
1851. 3	* <i>Twice-Told Tales</i> , 3rd ed. (SS)	Lenox, January 11, 1851
1851. 4	* <i>The House of the Seven Gables</i> (N)	Lenox, January 27, 1851
1851.11	* <i>A Wonder Book</i> (J)	Lenox, July 15th, 1851
1851.12	* <i>The Snow Image and Other Twice-Told Tales</i> (SS)	Preface dedicated "To Horatio Bridge, Esq., U.S.N.": Lenox, November 1st, 1951
1852. 7	* <i>The Blithedale Romance</i> (N)	Concord (Mass.), May, 1852
(1853. 7	Left America for Liverpool)	
1853. 8	+ <i>Tanglewood Tales</i> (J)	Introductory: "The Wayside: The Wayside, Concord, (Mass.) March 13, 1953
1854. 9	<i>Mosses From an Old Manse</i> , 2nd ed. (SS)	Introductory-like beginning of "Rappaccini's Daughter" about M. de l'Aubepine recollected
1860. 2	* <i>The Marble Faun</i> (N)	Leamington, October 15th, 1859
(1860. 6	Came back to Boston)	
1863. 9	* <i>Our Old Home</i> (Essays)	"To A Friend": The Wayside, July 2nd, 1863
(1864. 5	Died while travelling with F. Pierce in Plymouth, N.H.)	

* Preface

+ Introductory